

球春

豊澤 幸平

球春という言葉は、日本のプロ野球でキャンプやオープン戦が始まる二月初めを指し季語としても認められている。野球ファン、野球選手にとっては待ちに待った季節到来である。

キャンプでは一二球団がリーグ優勝と日本一をかけて一斉に練習を始め、野球好きには居ても立っても居られない時期である。各球団は温暖な四国、九州、沖縄で約一か月間、練習に明け暮れる。一軍の約三十人の練習メニューは、ウォーミングアップ、走り込み、ノック・守備練習、個人の打撃や投球練習、特打や特守、ウエートトレーニングである。キャンプ中盤からは紅白試合も行われる。

私は一九八五年前後、大阪や東京からキャンプ観戦に出かけた。主に西武ライオンズを追っかけ高知や宮崎に六年間、足を運んだ。

高知市内や宮崎市内のホテルに宿泊しまだあたりがうす暗い六時頃出発、高知はバスで郊外の春野球場、宮崎はJRローカル線で南郷駅に移動、八時に球場入りし午後四時頃まで約八時間、練習を飽きもせず見る。

一九八三年にも出かけたが、当時は広岡監督、東尾、田淵、石毛らが活躍していたがキャンプでは大田卓司外野手が強く印象に残った。

キャンプでは体調が万全でない選手は全体練習から離れ「別メニュー」で調整する。その年の大田は腰やひざが万全でなく、一人で外野フェンスの前のアンツーカーでインターバルトレーニングに黙々と励んでいた。ライバル達の順調な仕上がりを横目で見て焦り単調な練習に嫌気がさしていたかもしれない。外野席の至近距離から見えた大田は額に汗していた。「焦るな。俺の勝負は秋。来るべき日本シリーズだ」と自分に言い聞かせているように見えた。

その八か月後の十月の日本シリーズで大田は大活躍した。勝負強さを発揮しバットがさく裂、西武の日本一に貢献し栄えあるMVP（最優秀選手）に輝いた。その姿をテレビで観戦、キャンプでの大田の姿を思い出した。

今年のキャンプでどんなドラマが生まれるだろう。

(二〇二四年二月)